エッカート・フェルスター

カント以後の哲学の展開にとっての『判断力批判』第七六～七七節の意義

［第二部］

宮崎裕助・大熊洋行　訳

Eckart Förster

Die Bedeutung von §§ 76, 77 der *Kritik der Urteilskraft* für die Entwicklung der nachkantischen Philosophie

[Teil Ⅱ]

Übersetzt von
Yusuke MIZAYAKI
Hiroyuki OKUMA

In: *Zeitschrift für philosophische Forschung* 56. 3 (2002), S. 321-345

私が自らの精神的な展開の来し方を眺めるなら、そうした道程のそこかしこであなたに負うところが大きいということに気づきます。そうしたわけで、自分自身をあなたの子どものひとりであると称してもよいくらいだと思っています。私の内面は抽象に対して抵抗していく強さをあなたからもらっていたのだし、あなたの教養と導きにそって歩みを進めてきたのでした。

（一八二五年四月二四日付ヘーゲルのゲーテ宛書簡）

この論文の第一部においてわれわれが見たのは、『判断力批判』の第七六～七七節において、知的直観と直観的悟性というふたつの異なる、相互に還元しえない認識能力が問題とされていたということであった。カントに従えば、われわれの認識の仕方を唯一可能なものとみなさないようにするためにはこの能力を考えなくてはならない。しかしこの能力とは、その可能性に関して見通すことが不可能なものであり、それゆえに、われわれの認識の限界の彼方に、われわれにとって実現不可能なオルタナティヴとしてのみあるものなのである。われわれは他方でまた、カントのすぐ後の世代においてふたつの限界を越えていく試みがなされていたのを見た。すなわちフィヒテだけでなく、なによりもシェリングが知的直観を彼の哲学の根本に据えた一方で、ゲーテが直観的悟性の方法論を展開し、彼の自然哲学的な仕事において適用したということを見たのであった。以下の続篇で示されるのは、知的直観と直観的悟性とがヘーゲルの哲学的展開においていかなる意義をもつことになるのか、ということである。

I

ヘーゲルは、イェーナ期最初の出版物である一八〇一年の『フィヒテとシェリングの哲学体系の差異』において、哲学の課題を意識の有限性を克服すること、そして意識において絶対的なものを構成すること、としている。これにあわせてヘーゲルは、フィヒテの始元の思弁的原理たる自我＝自我の形式における主観と客観の同一性について、フィヒテが自らの体系を意識の有限性の連鎖にむかって構築していくなかでこの同一性を「脱ポテンツ化」してしまったと批判した。この有限性からは、真の思弁的本質を生み出すこととなる、当の同一性と真の無限性がふたたび得られることはない。「原理をなす〈主観－客観〉は、主観的な〈主観－客観〉であることが明らかとなる」（1）。これにたいしてヘーゲルは絶対的なものの認識可能性を対置する。この絶対的なものにおいて反省と直観とはひとつのものとなり、「主観的同一性も客観的同一性も」それらのうちどちらかが優位であるということはなくなる。より精確にいえば認識は、一方で消極的な機能、つまり対立するものの同一性を示すことにおけるたんなる反省という機能において、すなわちアンチノミーにおいて、そしてそれによってたんなる悟性認識を克服することにおいて成立する。他方で積極的な機能においてこの認識は、知的ないし「超越論的」直観である。この直観は、思考された統一の現実性を保証し、反省が有限性の無限の連鎖のなかで散り散りになることを防ぐ。そして直観の主観的なもの、したがって直観するものそれ自体はすべてのものから捨象されることとなり、その結果ヘーゲルは次のようにいうことができるようになる。「超越論的知は反省と直観の両者を合一する。それは概念であると同時に存在でもある」（GW 4:27〔『理性の復権』四〇頁〕）。

こうしたフィヒテ批判の根底に絶対的認識のモデルがあることを看て取るのはたやすい。このモデルはカントの、存在と思考、主観的なものと客観的なものとが一致する（知的直観ないし理性の直観としての）根拠についての思考をふくむ『判断力批判』第七六節に沿うものである。ここでシェリングがヘーゲルに対して及ぼした影響を見逃すことはできない。なぜならヘーゲルの〔イェーナ期以前の〕フランクフルト時代の知られているかぎり最後の仕事においては、絶対的なものは生命であると理解されており、主観－客観の「超越論的」ないし知的直観はいかなる役割も果たしてはいないからである。それに対してシェリングはすでに初期著作『自我について』以来、知的直観という思考の方法的理想に取り組んでいた。カントは上述の第七六節において、たんに批判的な意図のもとに知的直観を導入したのであったが、シェリングはすぐさま積極的に転用したのであった。

シェリングの思考に関してわれわれにとってとくに興味深い点は、彼の同一哲学についての第一の著作『私の哲学の体系の叙述』においてとりわけはっきりとあらわれている。この著作は一八〇一年五月にシェリングの『思弁哲学雑誌』に掲載されたもので、ヘーゲルも『差異論文』においてこれに沿うかたちで自らを位置づけていた。『叙述』によってシェリングがいわゆる超越論的哲学と自然哲学との「無差別点」ないし絶対的理性の立場を得たのは、それが主観的なものと客観的なものとの完全な同一として考えられるかぎりにおいてである。

したがって、われわれの主張はきわめて明瞭に表現するならば、以下のようなものである。すなわち、もしかりに、存在するいっさいのものを総体において目にすることができるとすれば、われわれが全体において気づくのは、主観性と客観性との完全な量的均衡であろうし、したがってまさに純粋な同一性、つまりたとえば個別者を顧慮すれば、一方の面か他方の面か、そのいずれかに優勢が属するとしても、そのうちでは何ものも区

別できないような純粋な同一性にほかならないであろうということ、したがってまた、あの量的な差別もやはり自体的に措定されているのではなく、むしろただ現象の内にのみ措定されているということ、これがわれわれの主張である。[…] しかしこの同一性は産出されたものではなく、むしろ根源的なものである。そして、その同一性が産出されるのは、ただそれが存在するがゆえにのことにすぎない。(2)

フィヒテとの往復書簡においてもシェリングはこの時期、絶対的なものの理念について、直観が思考においてあるもの、思考が直観においてあるものとして、ふたたび『判断力批判』第七六節を明示的に参照しつつ語っている(3)。

II

シェリングとヘーゲルがイェーナでともに過ごした二年半ほどのあいだ、彼らはかなりの時間をひとつ屋根の下で過ごしただけではなく、哲学についても協働していた。これについてはなによりも『哲学批判雑誌』の出版をあげることができる。この雑誌においてシェリングとヘーゲルは、ふたりでひとりの著作家であったのであり、個々の論文についてそれぞれの個人の名を付すことはなかった。それゆえにふたりの哲学が共通であるという印象は彼ら自身によって意図されたものであり、当然の成り行きでもあった。

一八〇三／〇四年からヘーゲルとシェリングのあいだには明らかな隔たりが生じた。シェリングは一八〇三年の五月にはイェーナをはなれ、ヴュルツブルクへの招きを受け入れた。一八〇七年のヘーゲルによる『精神現象学』の出版とともに、かつての友好関係は完全に終わりを迎えることになる。シェリングはヘーゲルとの手紙のやりと

りにおいて、『精神現象学』で示されたシェリングへの批判についての不満をほとんど隠しえなかった。こうしたやりとりは短期間のうちに終わり、その後ふたりの個人的な関係は最終的に終わりを迎えることとなったのだった(4)。ふたりが疎遠になっていくのと同時に、ヘーゲルの立場もまた根本的に変わっていった。このように立場が変わっていったことに関して、今日にいたるまでその最終的な理由は解明されていない。しかし次のことについてはヘーゲル研究者のあいだで意見の一致が見られているように思われる。すなわち、一八〇三／〇四年からヘーゲルの体系構想は根本的に新しいものとなったのであり、たしかに曖昧さがいくばくかは残され、実際にその関係は満足のいくほど明らかなものとはされえなかったけれども、新しい精神概念と結び付けられるにいたったのだった。今日まで知られている、この時代においてヘーゲルが哲学的展開へといたった理由について、私はここでことさら問題とすることはしないし、詳しく検討することもできない(5)。しかしそこであげられている理由だけでは、彼の哲学的展開について本当に理解するためには不十分である。たとえば次のことが不明なままである。一八〇四年以降、体系の部門である「論理学と形而上学」が放棄され、形而上学そのものが論理学となっており、これにはさらに(以前には言及されることがなかった)『精神現象学』が先行せねばならないということになる(6)。こうした変更が加えられたことについての理由が不明なままなのである。

次に、以下のテーゼを主張することにしよう。ヘーゲルによって一八〇三年に始められたゲーテの学的な概念との取り組みが、イェーナにおける体系構想の展開に関して重要であるにもかかわらず見逃されてきた、というテーゼである。これは友人であるシェルヴァーによって刺激されたものである。端的に(しかも相当に単純化して)いえば、ヘーゲルに固有の哲学概念において一八〇三／〇四年以降、『判断力批判』の意味での直観的悟性をめぐるシェリング的な解釈から、ゲーテ的な解釈への移り変わりが生じている。換言すれば、概念と存在、可能性と現実性が

合一しているひとつの根拠ないし直観から、総合的－普遍的なものを起点として特殊なものへと進んでいく理性への移り変わり――しかしそれに伴って絶対的なものの（認識についての）これまでとは別の概念への移り変わりが生じているのである。

この件に関して理解しておかなくてはならないのは、ヘーゲルが一八〇三年までは絶対的なものをめぐって、シェリングとまったく同様に、一貫して『判断力批判』の第七六節における根源的な思考に沿って考えているということ、そしてシェリングとまったく同様に、知的直観と直観的悟性とを同一視し、両者を区別していないということである。第七六節と第七七節の本質的な差異、したがってカントによって示された、相異なる人間的認識能力の限界を指し示す両者のあいだの差異はヘーゲルとシェリングによって等しく看過ごされている。だからヘーゲルは、たとえば『信仰と知』（また先にあげた『差異論文』）ではまったくシェリングと同じ意味において、直観的悟性と知的直観とをひとまとめにし、スピノザ的に自己原因（カウサ・スイ）として、「そこにおいては概念と直観、可能性と現実性が一体であるものとして」示したのである（GW 4, 342〔『信仰と知』四八頁〕）(7)。こうした事情もあってヘーゲルはまた、カントの直観的悟性の解釈を総合的－普遍的悟性、すなわち部分から全体へと論弁的に向かうのではなく、全体から部分を規定する悟性、「そこにおいてはなにひとつ否定されず、規定されることのない無限性」（GW 4, 354〔『信仰と知』七〇頁〕）であると誤解し、それによって知的直観と直観的悟性という、カントによる区別において独自の点を看過ごしてしまった。したがって後者をスピノザ的自己原因としてではなく、直観知の意味において解釈することについて、この時点でヘーゲルはまだなにも耳にしてはいないように思われるのである。こうした把握がゲーテとの関わりを通してどれほど変わったのかということ、これは本論文の第Ⅳ節で探ることにしたい。

まず私は、部分的ないしごく限られた範囲でしか知られていない、歴史的－伝記的情報を引いてこなくてはなら

ない。それはヘーゲルとその友人であるシェルヴァー、そしてふたりがともに過ごしたイェーナ時代の行動をめぐる事柄である。したがって次の第Ⅲ節は、純粋に歴史的に記述する必要がある。この節のさらに次に続く節においてようやく私は、体系的な考察をふたたび取り上げることができるようになる。

Ⅲ

シェルヴァーから始めよう(8)。フランツ・ヨゼフ・シェルヴァーは一七七八(九?)年の七月二四日にオズナブリュックで生まれ、一七九六年の四月二〇日にイェーナ大学で医学部の学生として学籍登録した。医学のみならずさまざまな学科の講義を聴講し、植物学をバッチュ(ゲーテとともに一七九四年に植物園を創設した)のもとで、哲学をフィヒテのもとで学んだ。フィヒテは当時、知識学、論理学と形而上学、倫理学と自然法について講じており、バッチュもこれに出席していた(9)。この時期はフィヒテがはじめて知識学「新しい方法」を講義した時期にあたる一方で、また知識学の第一、第二序論を出版した時期でもある。一七九七年の秋にシェルヴァーはゲッチンゲンに移り、一年後に博士学位論文「被刺激性について」を書き上げて修了している。

一八〇一年から一八〇三年までシェルヴァーはハレ大学の私講師であった。彼はそこで一八〇二年から自然哲学についての講義を担当し、シェリングと自らの考えを接続しようとしていた(10)。同年、執筆者が彼のみの雑誌で第二号まで出た『有機自然学雑誌』が出版された(11)。これによって彼はより広い公衆の前に登場したことになる。

この印刷物を手がかりにしてイェーナへの招聘直前のシェルヴァーの精神的プロフィール像を手にしようと試みるなら、今日の読者にとっては不整合な点が目に付く。この不整合とは、序論の要求(フィヒテの超越論的哲学的

な意味での）と実際になされた議論とのあいだにある不整合である。というのも実際の議論はシェリングの、とくに『私の哲学の体系の叙述』において見出されるような同一哲学の図式を、彼の諸対象にたんに表面的にのみ適用したものであるようにも思われるからだ。

シェルヴァーは序論において彼の読者に、生きている精神だけが生の無限の精神を把握しうるという理由で、「内的な生」を携えることを求めている。フィヒテの「知識学への第二序論」に明確に依拠しつつ、シェルヴァーは次のように述べる。「事実〔Tatsache〕は、最終的に行為と生とにおいて展開する。事実を成立させ、この事実を見守るときにのみ、洞察を得ることになる。しかし、行為を生成へと措定するものは、精神の生きた力を通してのみ生じる創造へと高まっていくのである」(12)。彼はシェリングと同様の仕方で論述を進め、その結果、有機的形成を構成するために、種のすべての事実に対して共通の無差別点を見ることになる［これは「生成へと措定する」のとは別のことであることに注意しなくてはならない］。こうしたことが生じるのは、シェルヴァーが各々の無差別点に属する極を、さまざまな段階を通して追っていることから生じている。

> かくて種の諸事実が共通の無差別点の極へと展開しうるのである。この段階を超えて、なにものも個別的なものへといたることはできない。これこそが進展の限界なのである。だから種は類によって与えられるのであり、無差別の点は極により、逆に極は無差別の点によって与えられるのである。すべての有機体はそれ自身において閉じられた世界であり、より上位の構造の分肢でもある。それゆえにいかなる無差別点も絶対的なものではなく、無限なものへと向かう宇宙は安らいにある無限の行為である。(13)

この意味において類の区分、神経と骨格のシステム、筋肉と血管のシステム、病気と治癒との関係にある胃のシステム、そういったものはおのおのが等しく外的な図式にしたがって構成されているのである。

シェルヴァーがシェリングの構成原理をまさしく取り入れているということを、彼は一八〇二年の、バンベルクの医師アンドレアス・レーシュラウプの手によるふたつの論文についての書評においても示している。ここではとくに、レーシュラウプは「シェリング的な創造の無限な精神についてまったく触れておらず、自然哲学についてたんにあやふやな知識しか持ち合わせていない」といわれているが、他方でまた思弁的自然学の「すべてを支配する頂点」にいたったなら、正しい「種々の病気の構成」に成功するであろうともいわれている(14)。

シェリング自身はシェルヴァーが自分へ依拠するあり方にやや批判的であった。エアランゲン文芸新聞の編集者であるG・E・A・メーメル宛一八〇二年三月一日付書簡で、シェルヴァーは自らをシェリングの自然哲学の完全な理解者であると称してはいるけれども、実際にはなおいくつかの点において理解に欠けているところがある、と書き送っている(15)。他方でシェリングはゲーテに、バッチュが一八〇二年に亡くなったあとのイェーナにおける植物学教授の新しいポストにかんして、シェルヴァーを推薦してもいる(16)。

この教授ポスト、ゲーテが主として（フォイクトとともに）選出する権利をもっていたポストは、私のテーゼにおいては重要な意味をもっている。すでに言及したように、ゲーテはイェーナの教授であるA・J・G・K・バッチュとともに、一七九四年にフュルステンガルテンのなかに自前の施設をもつ植物園を設立しており、それにかかわる一連の流れのなかで同時に、医学部の意図に反して、植物学を医学の補助的な学から自立的な学科へと昇格させるにいたった。植物学教授は以後、哲学部に属することとなったのである。それよって大学の学内政治的にも、ゲーテの形態学ないしメタモルフォーゼ論の学的構築のための重要なステップがなされたことになる。医学的な目的も、

経済的な目的も庭園の計画を規定してはおらず、たんに形態学的-体系的目的のみがそれを規定することとなったのである。

> 植物園の目的はすべての種、できるかぎり多種多様な植物種を所有することであり、それによって植物を育成し、可能なかぎり植物学の研究に役立てることである。それゆえ優秀な庭園の管理者は植物をその植物に適した土壌の上にというよりは、むしろ体系的な秩序に即して育てなくてはならない。(17)

しかしゲーテはすでにかなりの落胆を示しながら、バッチュが自身の著作において、ゲーテの方法論にたいした顧慮を与えていないことを認めてもいたのだった(18)。

シェルヴァーは一八〇三年、バッチュの後任として職につき、それにともない植物園の仕事にも取り組んだ。その間ゲーテはシェルヴァーの雇用契約に含まれた追加条項によって次のことを確認している。シェルヴァーには「庭園、ビートの配置などといった構成」に関して一切変更することは許されていない。「すべてはこれまで通りの方向性で進め」られなくてはならない(19)。ゲーテはまた、シェルヴァーへと個人的に庭園の仕事について熱心に手ほどきをしたし、彼の植物学の講義における庭園の使用に関しても助言を与えた。他方でシェルヴァーは、通常の業務に加えて、なによりもさまざまな新しいコレクションと「小さな植物園」の陳列棚を充実させるという課題を担ってもいた(20)。ヘーゲルはこの時代、すでにシェルヴァーと親しい関係を築いていたし、その活動に携わってもいた(21)。彼は一八〇三年一一月一六日にシェリングに宛てて次のように書き送っている。「ゲーテはきわめて熱心に実際的なものと設備とに取り組んでいます。彼はシェルヴァーに植物の陳列棚の充実のみならず、生理学の

陳列棚までも設置させています」(22)。

こうした関係からもおそらく次のことが明らかとなるだろう。シェルヴァーはきわめて短期間に、ゲーテの形態学的思考に否定的だった立場から、ゲーテの方法論を根底的に受け入れてわがものとするような立場へと移り変わる、といった学的展開を果たしていたのである。彼は当初「植物のメタモルフォーゼ」が思弁的に十分であるとはみていなかったし、シェリングに宛てて、それが「ひどく経験的な必然性でもって」満足し、「ひどく一般的な抽象」であると批判していた(23)。ゲーテのもとで、彼による集中的で個人的な指導というきわめて実践的な課題に取り組んだことで、シェルヴァーの考えは驚くべき速さで変わっていったのである。

一八〇三年一一月二七日にシェルヴァーとヘーゲルがゲーテのもとを訪れたあとに、ゲーテは同じ夜にシラーに宛てて次のように書き送っている。「本当に心地よい時間を私はシェルヴァー、ヘーゲルそしてフェルノーと過ごしました。シェルヴァーは私が適切だと思うものにしたがって、植物学に関して本当によく働いてくれており、私は自分自身の耳や目をほとんど信じられないくらいです」(24)。他方でまた、シェルヴァーの授業予告から、シェルヴァーがゲーテの「適切だと思うもの」を次第に自分のものとしていく次第を看て取ることができる。すなわち一八〇三年冬学期、彼のイェーナでの最初の学期においてはたんに「植物学」と予告しているのに対して、続く年からは「植物学にかかわるエクスカーションとの関連における植物学」を予告し、「公爵の庭園を利用して」教えている(25)。またゲーテのほうも彼の講義を、シェルヴァーがシェリングにその年の夏に報告していたように、とくに気にかけていたのであった(26)。

一八〇五年にシェルヴァーの雇用契約がゲーテのとりなしによって延長されたさいには、次のような理由が付された。「自らの職務を全うするためにいっそうの努力を怠ることのない、この学識ある若者がアカデミーに雇用さ

れることは本当に望ましいことです」(27)。しかしながら一八〇六年一〇月一四日のイェーナにおける戦いにさいして、プロイセンの軍隊が壊滅的な敗北を喫したあとに、シェルヴァーはナポレオン軍によってすべてを奪われ、彼の博物標本の陳列棚は軒並み破壊されてしまった。その結果彼はイェーナを慌ただしくあとにし、ハイデルベルクで教授の職を得ることとなった(28)。

私の目に決定的であるように映るのは、ゲーテがこの三年間のあいだに、シェルヴァーにたいしてゲーテ的な意味での植物学を教え込んでいたことである(29)。シェルヴァー自身がゲーテのもとで過ごした修行期間についてどのような意義を認めていたかということは、とくに次のことから読み取ることができる。シェルヴァーはイェーナを出て一六年後に一冊の本をゲーテに送っている。「あなたの意義深いコレクションに囲まれ、あなたの細やかな指導のもとで私の魂の目が開かれていった、あの忘れがたい日々」と書き記され捧げられたこの作品は「私があなたによって手ほどきを受けた軽やかで自由な眺めに対する、ささやかなお礼となる」ことが祈念されている(30)。ゲーテもまたシェルヴァーを高く評価し続けた。それから二〇年たってなおも彼はシェルヴァーについて、自然学についての多大な功績に関してきわめて好意的に言及している(31)。

次にヘーゲルについて触れよう。すでに述べたように、彼は友人の学問活動に積極的に関わっている。そのさい、明らかに彼自身も実際に活動に参加していた。ローゼンクランツの手になる彼の伝記はこのふたりの友人たちの植物学についての共同作業を報告している。それに加えてまた、たとえばヘーゲルが自らすすんでゲーテの色彩論についての実験を再現していたことも伝えている(32)。それにもまして重要なことに、彼はシェルヴァーを介してゲーテといっそう親しく知り合うようになってもいた。たびたび彼らはともにヴァイマールの家に招かれ、ゲーテはヘーゲルの口下手を治す方法について案じてもいた。ヘーゲルの学問的能力について、ゲーテは瞬く間のうちに深く感

銘を受けたのであった。すでに一八〇三年の一一月には、シラー宛にヘーゲルは「ひとりのきわめて卓越した人間」であると書き送り(33)、彼の同僚フォイクトは一八〇四年七月二日のフランケンベルクへの手紙で、「ゲーテは彼[ヘーゲル]についてどうすれば十全に語ることができるのかわからない」と報告している(34)。ヘーゲルはイェーナの神学教授であるパウルスによるスピノザの編集にきわめて短いあいだ参加していたが、パウルスは次のようにヘーゲルについて報告している。「数学と生理学的知識に関して言えば、ゲーテは、私にいくども語っていたように、シェリングよりもむしろヘーゲルを高く買っていた」(35)。

一八〇四年の夏、ヘーゲルは自身の諸講義の彫琢に加えて、同時に、先に述べた、自らの哲学の新しい概念にも取り組んでいる。これはゲーテの手にも渡ることが望まれ、同時にまた昇進の望みもかけられていたものである。これについてヘーゲルは一八〇四年九月二九日付ゲーテ宛書簡で「私のこれまでの著作はあまりにも取るに足らないものであって、貴殿の目にあえてさらすに耐えることのできないものです。私がこの冬に講義のために完成させようと考えている仕事の目的、哲学の純粋な学的仕上げ、これこそが、お許しいただけるのであれば、貴殿にお目にかけることのできるものです」(36)。この「哲学の学的仕上げ」、ヘーゲルがゲーテの学的基準にかなうものであると望まずにはいられなかったこの仕事こそ、浄書の一部が残されている一八〇四／〇五年の「論理学、形而上学、自然哲学」であるということは、今日ではほとんど確かなことといえる(37)。ヘーゲルはしかし、ゲーテにこれを送ることはなかったし、それどころかこの仕事を突然放棄してしまった。この理由については後でまた扱うことにする。

ヘーゲルがさらなる延期と改訂ののちにようやく『精神現象学』の出版に漕ぎつけることができたとき、ゲーテはK・L・フォン・クネーベルに次のように書き送っている。「ヘーゲルが自身の著作の出版の要請でバンベルク

に向かったことは、私にとって本当に嬉しいことです。彼の思考の仕方が呈示されるのを見てみたい。彼はきわめて卓越した頭脳をもっており、互いに分かり合うことが大変に難しいのです」(38)。

ともあれ、ゲーテによるヘーゲルの能力についての評価よりもむしろ、ヘーゲルによるゲーテの思考と学的方法論への信頼のほうが私には重要に思われる。それゆえにこれまでの関係においてとくに注目に値するのは、ヘーゲルがゲーテに、シェルヴァーがイェーナを去ったすぐあとに、彼の友人の後継者として自ら名乗り出たことである。これはたしかに、シェルヴァーのまだ使われていない手当の一部を自分自身の身入りを改善させるために充当しえたら、という望みによって強く動機づけられたものではあった。しかし他方でまた、ヘーゲル自身がこうした仕事をする資格のある者とみていた自己理解も窺える。「植物園にある資源によって、そしてこれに関して貴殿の保護をお願いしてもよろしいのであれば、私はすぐにでも植物学の講義を哲学に加えて担当することができます」(39)。以上のことからヘーゲルが、完全にゲーテの意味において形態学を担当しうるという前提に立っていたということが明らかとなるだろう。

とはいえ、ゲーテはこの提案を受けることはなかった。彼はすでにシェルヴァーの後任人事について別の人物を決めていたのである(40)。しかしこれは、彼のヘーゲルに対する高い評価が揺らいでいたということを意味しない。フォン・クネーベルがすぐさま伝えていたように、ゲーテはヘーゲルとシェルヴァー、そして(物理学者であり、化学者でもある)ゼーベック「だけがアカデミーを成しうる」という確信を述べていたのだった(41)。

Ⅳ

こうした純粋に歴史的な考察によって、シェルヴァーおよびヘーゲルをめぐる次のような問いが生まれてくる。シェルヴァーについての問いは、彼がゲーテの導きによって、初期のシェリングを模倣する自然哲学から離れ、ゲーテ主義者になることを促す新たなものを得たのかどうか、ということである。他方ヘーゲルについては、この導きから自身の哲学に対してなんらかの帰結を引き出すことができたのか、ということが問題となる。なぜならまさにヘーゲルとシェルヴァーの友人関係においてきわめて早い段階で、先に述べたような、ヘーゲルの哲学概念の変化と、シェリングからのはっきりとした驚くほど冷淡な離反とが生じているからである。ヘーゲルはすでにこの時代の「イェーナ体系草稿」に、次のように書き記している。「シェリング哲学の本質はそのうち明らかになる。それについての審判はもはや扉の前にあるのだ」。「自然哲学。そのなかで物事が嘘偽りなく進行していくまでにはかなりの時間が経過することになるだろう」(GW 5: 494, 503)。

この問いに少なくとも部分的にでも答えるために、私はふたたび「植物のメタモルフォーゼ」から始めることとしたい。それはもちろん、ゲーテが一般的に直観知(scientia intuitiva)ということで念頭においている手続きの仕方の一例である。ゲーテはすでにイタリアから次のように書き送っていた。ゲーテは彼の方法を他の領域に適用しようとしていたし、イェーナの自然科学研究所を彼の意のもとに運営しようという努力は、間接的ではあったにせよ、意義深い成果をもたらすものでもあった。これはいっそうはっきりと強調されるべき事柄である。なぜならヘーゲルにとってもまた、われわれがのちにもう一度見るように、もちろん植物のメタモルフォーゼそれ自体が問

題となるのではないにせよ、そこから展開された直観的悟性の方法論は問題とされることとなるからである。シェルヴァーとヘーゲルの関係においてメタモルフォーゼの議論は、疑いなくもっとも重要な役割を果たす。それゆえにこの議論は、友人であるふたりがどのようにそれに対応しえたのかという問いを検討するために、ひとつの例として役立つように思われる。なにがメタモルフォーゼの議論から学ばれるべきだろうか。目下の関係においてはなによりも次のふたつの点がとくに興味深い事柄である。

第一の点としてあげられるのは、ゲーテの植物のメタモルフォーゼの帰結は概念的に、拡張と収縮との三重の交替として記述されうる、ということである。すなわち、その交替において不変の理念、同一の器官は多様な形態に対応する環境の諸条件を示す（「植物のメタモルフォーゼ」第七三節〔『形態学論集』一五五―一六〇頁〕参照）。この帰結は、たしかに論弁的に再提示されるのではあるけれども、本論文の第一部において示すことが試みられたように（42）、論弁的な仕方で獲得されるのではなく、たんに直観化した悟性を介してのみ獲得されるのである。なぜならそのようにふるまうということ、むしろふるまうかどうか、もしくはこのことが具体的に意味していること、こうしたことを私が理解できるのは、ゲーテによればなによりも次の場合だからである。つまり（a）ともに顕花植物のライフサイクルをかたちづくる連続する諸形態の完全な系列を作り出し、（b）この諸形態の系列にそくして概念を「流動化」し、思考を直観化することで、諸部分間の移行を認識しうるようにする場合である。私が、そのつど拡張と収縮との運動である、こうした移行を精神において跡づける場合、以下のことが明らかとなる。（c）いつも同じひとつの「理念」、同じひとつの理念的「器官」こそがここでは（すべての顕花植物においてそうであるように）六段階において形態化し、メタモルフォーゼしている、ということである（43）。

ここから第二の点が導かれることになる。すなわち理念は、探究の根底にはありえず探究を動機づけることもで

きないという点である。したがって形態の完全な系列をひとつの有機的な全体として把握することは、理念の認識に必然的に先行する。これにしたがって第一に、理念はまたこの諸形態から独立に与えられうることになる。それゆえゲーテは、あるひとつの形態からほかの形態への移行を、メタモルフォーゼの根底にある理念を認識しようとする場合に、学者が苦労して到達せねばならない「精神的梯子」（「植物のメタモルフォーゼ」第六節〔『形態学論集』一〇一頁〕）であると言っているのである。

特徴的なことにシェリングはまた、彼の同一哲学を幾度か、とくに『私の哲学の体系の叙述』において、彼がゲーテから得たと信じていたメタモルフォーゼ概念を用いて（44）説明している。彼が与えている意義とこれまで言われてきたこととを比較することは有益である。彼は植物のメタモルフォーゼに、すべての植物の構成のみならず、化学的プロセス（第一二六節系二と一八〇一年一月二六日付ゲーテ宛書簡）、惑星系の形成（第九五節系二〔『叙述』九一頁〕）、宇宙（第九五節〔『叙述』八九頁〕vgl. SW 2, 125）、そして彼独自のポテンツ論（第九五節系五〔『叙述』九六頁〕、第一二六節系二も参照）、これらすべての根本図式を看て取っている。換言すれば、シェリングの同一哲学全体は彼自身によってメタモルフォーゼ論として理解されているのである。なかでもゲーテの理論からその根本図式として、拡張と収縮との交換を引き継いでもいる（第七八節〔『叙述』七六頁〕、vgl. SW 2: 172, 125）。すなわち「ひたすら対立する方向へ向かって多かれ少なかれ蓄積される、全体としてはまったくひとつの牽引・拡張力」（第九五節系五〔『叙述』九六頁〕）が存在するのである。こうして同一哲学は文字通りの意味で、生成を否定する（第一三、一四節〔『叙述』一二六頁〕一二六節系二）。それゆえにシェリングのメタモルフォーゼ概念は、根源的同一性の無時間的分化の概念であり、この分化は同じものの反復的なポテンツ化〔Potenzierung〕を通して構成されている。

われわれは根源的メタモルフォーゼ（第九五節）と、われわれが第二のメタモルフォーゼと呼んだ、一方で力学的であり、他方で化学的でもあるプロセスによって規定されるものとの関係について、これまでよりもはっきりと次のように表すことができる。根源的メタモルフォーゼとは、重力が絶対的同一性の存在〔Seyns〕のたんなる形式として漸次的に措定されていくことを意味している。絶対的同一性とはその領域の内部において光（A2）であり、その内部において重力は、たんなるポテンツ〔Potenz〕としてではなく、なおも重力として措定されている。これに対して絶対的同一性自体は、あの第一のメタモルフォーゼの直接的原因〔Ursache〕、ないしすべての根源的物質が属するあの第一の系列の直接的な措定〔Setzende〕でもある。それに対して第二のメタモルフォーゼの直接的原因は重力であり、あの第一のものが静止から引き出されたことにより、磁力の、電気の、そして全体において化学のプロセスによって重力が措定される諸ポテンツを廃棄すること〔aufzuheben〕を試みる。

（第一三九節注解）

有機的自然は最終的にそれ自身、より高次のポテンツにおいて反復される自然にほかならず（SW 2: 681）、それによって再生産、被刺激性、感受性は自然のプロセスの第三のポテンツを示すのである。

こうした理解はゲーテのメタモルフォーゼ論の本質を外しているというべきである。シェリングはたしかに本書に通じてはいた。しかし完全な形態の系列を手がかりにした、直観的思考をわがものとすることはなかった。それに対してシェルヴァーは、そして間接的にヘーゲルもまた、こうした思考をゲーテの導きのもとで身につけるほかなかったし、根底にある方法をほかの領域へと適用することを要求されてもいた。ヘーゲルがイェーナ期の終わり

に『精神現象学』への序文において定式化したシェリングの方法論への批判は、こうした背景のもとに語の選択にいたるまで理解されることになる。より仔細に考察してみれば、それは

種々の素材に外面的な仕方で適用された、同一のものの形態なき反復。

（第一五段落、GW 9:16-17〔一四頁〕、強調はフェルスターによる）

そこで内的な生命と、この生命の定在の自己運動とが語られる代わりに、「直観」によって、といっても、ここでは感覚的な知識にほかならぬ直観によって右のような単純な限定が表面的な類推にしたがって、ものごとについて言明され、公式のかかる外面的で空ろな適用が構成と呼ばれている。……例えば磁気のように、たとえ限定がそれ自体としては具体的なあるいは現実的な限定であるにしても、限定はなにかある死んだものになりさがっている。なぜなら、限定はほかの定在について「述語」せられ、くっつけられるだけであって、当の定在に内的生命としては認識されてはいないからである。

（第五一段落、GW 9:37-9〔五一頁〕、強調はフェルスターによる）

しかし、学的認識はむしろ対象の生命に身を捧げることを求める。

（第五三段落、GW 9:39〔同上〕）

さてしかし、ヘーゲルがシェリングに加えている非難はまた必要な変更を加えれば彼自身の初期イェーナ時代の論文にもあてはまるように思われる。『差異論文』にあって、絶対的なものは、意識において次のように構成され

うる。すなわち反省のすべての有限性に対し、対立する規定の反復的措定によってアンチノミーが生じる。これを承けて対立するものの同一性が示され、こうしたことによって絶対的なものが構成されるのである。ここにまたわれわれは、ひとつの同じ図式のまったく外的な適用をもつことになる。一八〇二年の『懐疑主義論文』では、これに対応して次のようにいわれる。「学とは内容的にみれば、この理性的な同一性の具体化であり、形式からすれば、この同一性の恒常的な反復である。……哲学という学も、またいつもただひとつの理性的同一性を繰り返す」（GW 4, 223f.〔『懐疑主義と哲学との関係』五六―五七頁〕）。

これに対しヘーゲルは一八〇三年以降、彼が先に引用したシェリングへの批判において定在の「内的生」と「自己運動」と名付けるものとを対置している。このことを裏打ちするものはなによりも、ヘーゲルがゲーテに献呈しようとした一八〇四年の「論理学、形而上学、自然哲学」である。ここにおいて初めて、反省の諸カテゴリーの同一が外的に発生するのではなく、諸カテゴリー自らが総体性へと運動する、ということが示される。ヘーゲルの初期論理学構想にあって、この浄書断片での論理学における固有でまったく新しいテーマは、まさに思考の諸規定の間の移行に集中している。

ヘーゲルが「両者の統一として端的に限界を生み出したにすぎない」、「観念的活動性と実在的活動性というふたつの対立する活動性からなる、いわゆる理念の構成」（GW 7:3〔『イェーナ論理学』七九頁〕）（45）について話すとき、当該テクストにおいてはまったく特徴的な仕方でシェリング批判が（その名があげられることはないにせよ）始められている。それは以下の通りである。ふたつの行為は構成において現実的に相互に統一されることはない。それらは互いに外的なものにとどまり続ける。つまりそれらのあいだには限界が、それ自体規定された第三項であり続ける仕方でのみ接することとなる、と批判するのである。こうしたシェリングの思考に対し、ヘーゲルは質のカテ

ゴリーから始めて次のことを示す。「限界」は現実性において実在と否定の弁証法的統一であり、こうしたことは質の概念を「他のものを考慮することなくたんに自分自身である」ものとして、一貫して考えるかぎりにおいて生じることとなる。なぜならこういった単純な統一のすべては規定されていることに基づくことによって、必然的に諸規定性の未規定な数多性を引き出し、それによってかえってまたただちに否定的に関係づけられることとなるからである。すべての質に固有な、否定されると同時に締め出される他のものとの関係というのは、ヘーゲルによれば限界の真なる概念である。

> 質は限界の内で次のようなものとなる、すなわち、質が自分の絶対的本質に従ってそれであるが、しかしながら、自分の概念（措定された本質）にしたがってそれであるべきではないところのものとなる。そして同時に、質の概念は、それがあるべきものとして措定されることによって、そうしたものへと移行せねばならない。かくして、限界は総体性、言い換えれば、真実の実在性である。この真実の実在性は、質の概念と比較されると、同時に概念の弁証法を含んでいるが、それは、その概念が自分自身の反対のものになっているというように、限界において自己を廃棄したからである。
>
> （GW 7:6〔『イェーナ論理学』八二頁〕）

限界の概念が、そこへと質の概念が必ず移行しなくてはならない概念であるならば、以下のこともまた限界について当てはまることになる。限界は互いに限界づけられたものを通してのみ規定されると同時に、こうした限界づけられたものを締め出しもする。すなわち限界とはなんらかの規定されたものであると同時に、規定されていないものなのである。限界がこうしたものであるということは、ヘーゲルによれば量の本質、すなわち規定態の数多性

がそれ〔存在〕にそくして無関与的なものとして締め出される存在である、ということなのである。それゆえヘーゲルは次のように書くことができる。「質の本質、すなわち限界は量である」。こうして一方の概念は他方の概念へと移行する。このことはいまや、ヘーゲルによれば、彼がここで発展させようと努めた、論理学のすべてのカテゴリーに当てはまる。「真無限とは、規定態が自己を廃棄するという要求の実在化されたものである。［…］有限なものの真の本性は、有限なものが無限であり、自分の存在のうちで自己を廃棄するということにほかならない」（GW 7:33〔『イェーナ論理学』一〇二頁〕）。

学はいまや一方で、対立するものの同一性の反復されたたんなる外的な呈示において成立するのではなく、その根本的な諸概念の固有の運動において成立する。他方でこれまで妥当してきた意味での超越論的直観は余分なものとなる。なぜならヘーゲルは概念の現実化を、概念がそうあるべきものとなること（総体性もしくは完全化する形式）として把握するからである。諸対立の弁証法的進展はなおもたしかに、われわれの反省を通して始められるけれども、論理学の終わりにおいては、論理的探究の対象である反省がそれ自身の認識へと移行し、それゆえに絶対的反省となるのである。

ヘーゲルはシェリングと一線を画する根底的な歩みにおけるこの段階で、形態学の方法を一八〇四年の論理学へと適用すること、諸概念を、それらの間の諸移行をテーマとすることを通して流動化させること、すなわち諸概念の内的生を提示すること、こうしたことを試みた(46)。かくてヘーゲルは次のことを安心して信じることができたのである。つまり「純粋に学的な哲学の仕事」を、ゲーテ宛てに書いた手紙にあるように、また、この仕事をゲーテにも提示しようと考えたように、遂行しえたと信じることができたのである。しかし実際にはこれをいまだなしえてはいなかった。「自然哲学」のある部分における浄書断片は突然、有機体への移行について論じられる部分で

中断し、その後書き継がれることはなかったのである。

なぜだろうか。概念の運動に加えるべき何が欠けているのだろうか。なぜ端緒（Ansatz）は拒絶されているのだろうか。私の考えではこの問いに回答しうるのは、ヘーゲルがその代わりに取り組んだものに目を向けた場合のみである。ヘーゲルは一八〇五年の冬学期に初めて開かれた、哲学の全歴史についての講義を準備していた。このように突然、歴史へと向かっていったことはそれ自体きわめて驚くべきことである。この講義までヘーゲルは『差異論文』において記述されていたように、哲学の歴史的発展は本来まったく存在しない、という立場にあった。すべての真の哲学は、ヘーゲルによればそれぞれの時代の媒介に基づいた、絶対的なものの体系的認識であり、したがって絶対的なものの理念は（ヘーゲル自身によって「論理学、形而上学、自然哲学」においてなおも（47））またいつも体系の端緒にあるというかぎりでは、それらは芸術の偉大な作品のように根本的に等しい資格で並び立っている。「哲学はすべてそれ自身において完成しており、真の芸術作品と同様、自己において総体性を有している」（GW 4:12〔『理性の復権』一五頁〕vgl. 117ff.〔同書一一七頁―一二二頁〕）。

こうした理解ほど一八〇五年の講義と異なるものはないだろう。彼の生徒たちの眼前にたんに、一八〇五年に初めて、現在にいたるまでの哲学の諸体系の歴史的諸形態の完全な系列が示されたというだけではない（48）。ヘーゲルの諸講義への導入において、まさに次のようなことが言われている。「われわれはここで問題となっていることを、「発展」の唯一の規定へとまとめることができる。これがわれわれにとってはっきりすれば、すべての残りのものもそれ自体で明らかとなり、帰結として導きだされていくだろう」（49）。

したがってわれわれは「「発展」の唯一の規定」を理解することを試みなくてはならない。これによって考えられていることを、ヘーゲルはきわめて興味深い仕方で植物のメタモルフォーゼをもとにしつつ、導入において語っ

ている。ヘーゲルによれば植物は胚芽から果実にいたるまでの、植物の（ゲーテ的に言えば、理念の）即自に支配されるサイクルを踏破する。サイクルの終わりにはふたたび胚芽が、しかし新しい胚芽であり、最初の胚芽とも異なる個体が、同じプロセスをもう一度初めからたどることになる。

胚種が自分自身を生み出し、自分自身に戻ろうとする。胚種のうちに含まれていたものは次々と外に出てきて、やがてまたもとの単一なものに戻っていくのである。自然の事物の場合には、いうまでもなく、出発点となる主体と、最終項をなす存在――果実、種子――は別々の個体である。ふたつは内容上同一というにすぎないのである。（51〔『哲学史講義』二七頁〕）

しかしヘーゲルは続ける。

精神の場合は異なる。精神が意識であり、自由であるのは、精神にあって始まりと終わりが合体するからである。［…］果実や種子を対象化するのは最初の胚種ではなく、植物の観察者たる私たちだけであるのに反し、精神の場合は、始まりと終わりとが観察者の目に同じものと見えるだけでなく、たがいにそのことを意識し、まさにそのことによって自覚的な存在たりえている。他者が対するものは、他者としての自らである。まさにこれによってのみ精神はそれ自身でその他者のうちにある。精神の発展は、外に出ていき、次々と自分を展開することであり、同時に、自分のもとにかえっていくことである。（51〔『哲学史講義』二八頁〕）

換言すれば、植物のメタモルフォーゼに即して範例的に発展した経験の仕方が精神やその諸形態に適用されることで、まったく新しいものが現れているのである。ここまでのことをまとめると次のようにいうことができるだろう。植物はほかの個体において自分自身と等しいものとなり、それが繰り返されていくことになる。他方で精神は自分自身の他者である。しかしそれによって本質的なものはなおも語られていない。その第一の理由は、ヘーゲルが自分自身の他者という定式を、すでに「論理学、形而上学、自然哲学」のなかで、最終的には生命モデルにしたがって考えられることになる、絶対精神に対して用いていたということがあげられる（Vgl. GW 7:174f., 181〔『論理学・形而上学』三三二―六頁、『自然哲学（上）』二〇―二二頁〕）。第二の理由としては、無限であり「自分自身にとどまるもの」でもある生命が、自ら自身の他者（有限な生物）が存在するかぎりにおいてのみ、この他者と同一になることなく、存在するということがあげられる。しかしヘーゲルがいまや哲学の体系をひとつの完全な系列において打ち立て、両者の間の移行を問題とすることで、新たな、より高次の経験が生じている。この歴史的諸形態、この諸体系は端緒の点に帰るのでもなければ、芸術の偉大な諸作品のように等しい資格で並び立つのでもない。むしろ自分自身から出発し、自分自身を超えて、自らの他者となるのである。『精神現象学』においてヘーゲルは以上の事柄を次のように表現している。「意識は自分自身において、すなわち自分の知においても自分の対象においても弁証法的な運動を行うのであるが、この運動から意識にとって新しい真実の対象が発源するかぎり、この運動こそまさに経験と呼ばれているものである」（GW 9:60〔『精神現象学』八九頁〕）。新しい第二の個物ではなく、第一の対象はそれ自体「新しい真の対象」であり、自分自身において自らを超えた経験を含みもつ（50）。つまり意識は自分自身で発展していき、それにともなって理念や精神もまた自分自身で発展していくのである。

これが正しいとすれば、他方でまた哲学の学的方法論として妥当するものもまたふたたび変化しなくてはならな

い。これについてもまた哲学史講義の一節を引いておく。

> 実際、哲学の概念が恣意的ではなく学問的に確定されねばならない以上、確定の作業が哲学そのものになる。なぜなら、これは哲学に独特のことであるけれども、哲学の概念がはじまりをなすのは見かけだけのことで、本当は、哲学の論述全体をまってはじめて概念が証明される、いや、それによってはじめて概念が発見されるとさえ言えるので、概念は本質的に論述の結果として現れるからである。（25f.〔『哲学史講義』七頁〕）

ここからまた、なぜヘーゲルが（ゲーテに書き送ったように）純粋に学的な哲学の仕事となるべきであった「論理学、形而上学、自然哲学」を中断したのか、ということもまた理解されうる。なぜならここにもまた絶対的なものの理念が、端緒において自らと等しいものとしてあるからである。「論理学は自分と等しいものとしての統一から始まる」（GW 7:129〔『論理学・形而上学』二四二頁〕）。しかしこれは学的なものとは思われない（51）。絶対的なもの、ないし理念は、知的ないし「超越論的」直観（たとえば『差異論文』におけるようなもの）でもなければ、論理学のつねに等しくあり続ける「地盤」（「論理学、形而上学、自然哲学」におけるような（Vgl. GW 7:129.3, 124.8〔『論理学・形而上学』二四二―三頁〕））、論理学の端緒でもなく、諸概念の運動を動機づけるものでもない。むしろたんに結果でしかありえないのである。「本質的に理性の本性であるのは、発展すること、発展を通してのみ把握され、本来の理念になることにある」（49〔『哲学史講義』二五頁〕）。

これによってヘーゲルはまた、私が先にヘーゲルとシェルヴァーがゲーテについて学んだであろうもののうち、第二のものとして性格付けたものを見出した。つまりそれは、完全な形態の系列を有機的全体として把握すること

が理念の認識に必然的に先行する、ということである。ただしヘーゲルは同時にひとつの最高度に意義深い一歩を、ゲーテを超えて踏み出してもいる。哲学が認識することを試みる理念は、たんに完全な形態の系列の終わりにおいて初めて認識可能であるのではなく、むしろその理念自体はまずもって、その系列の終わりに理念であるものなのである。理念とは本質的にプロセスであり、弁証法的である。

ヘーゲル自身の体系概念にとってこれはふたつの帰結を有する。第一の帰結は、一八〇四年までに自明とされていた論理学と形而上学との分離が、廃棄されなくてはならないということである。なぜならこれまで論理学にふさわしいとされてきた課題は、有限なものの弁証法的本性を指し示し、思弁の始元へと導くことであったが、それに対して形而上学は「理念の学」であり、それを体系的に提示するものとされてきたからである。しかしそのさいに理念は「永遠に一にして同一のもの」（GW 4:10〔『理性の復権』一二頁〕）「統一そのもの」（GW 7:129〔『論理学・形而上学』二四二頁〕）と考えられていた。理念がそれ自身で展開し、本質的に弁証法的であるのなら、形而上学は学として弁証法的であり、それにより論理学もまた学として弁証法的となる。ふたつの相異なる分野への分割は不要となるのである。

第二の帰結としては次のことがあげられる。新しい論理学は発展途上の理念を呈示し、それにともない理念を既知のものとして前提するものとなる。これを承けて、理念がその終わりにおいて認識されることとなる意識の諸形態の完全な系列が、論理学に先行せねばならないということになる。つまりこれこそが精神のメタモルフォーゼの呈示が指すものであり、『精神現象学』の最初のタイトルのように「意識経験の学」が指すものなのである。こうした背景からまた、この著作において与えられた意識の諸形態の秩序がようやく理解されうるようになる。この秩序は正確な歴史的年代には対応せず、植物園の植物のように、全体を一挙に見渡すことを可能とするためになくて

はならない位置に配置される。『精神現象学』を自ら紹介する文中でヘーゲルが書いているように、彼の本は

> さまざまな精神の形態を旅路の宿駅として自分のうちに含む。これらの宿駅を通ることで精神は純粋知あるいは絶対精神となる。……一見したところ混沌のごとく現れ出る精神の諸現象の王国が、それらを必然性にしたがって叙述するひとつの学的な秩序へともたらされる。（GW 9:446〔「『イェーナ一般文芸新聞』における自著紹介」樫山欽四郎訳、『精神現象学』平凡社ライブラリー、一九九七年、二二三―四頁〕）

先に言及したようにゲーテは、ある形態が完全な系列のなかのほかの形態へと移り変わっていくことを「精神的梯子」（第六節〔『形態学論集』一〇一頁〕）と名付けている。これは理念を認識しようとする場合に、学者が到達しなくてはならないものである。ヘーゲルは彼の『精神現象学』を、その序文において、思弁にいたるために到達されねばならない「梯子」として特徴的な仕方で性格付けている（第二六段落、GW 9:23〔『精神現象学』二五頁〕参照）。この語の選択が偶然になされたものではないことは、私にはある講義を通して容易に推測される。ヘーゲルはさらに数年ののちに、この講義においてゲーテの「植物のメタモルフォーゼ」をはっきりと「精神的梯子」として指し示しているのである（第三四五節系〔『自然哲学』加藤尚武訳、岩波書店、一九九九年、四九四―五一〇頁〕Theorie Werkausgabe Bd.9）。さらに『精神現象学』がまさにここに記述された方法論的プログラムを実現している、という点を認めることも難しいことではない。（a）意識の諸形態の完全な系列をつくり出し、（b）なによりも形態間の移行を問題としつつ、諸形態を全体として跡づけながら考察している。そしてその結果、最終的に（c）理念、「純粋概念」の認識ないし「絶対知」が成立することになるのである（52）。

諸移行は決定的なものである。そして意識の特殊な諸形態とは結局、全体を全体として端的に直観化するためにこの位置になくてはならないもののための諸例なのである。このことから次のことが理解される。つまりそうでないのなら、『精神現象学』の公刊のあとに出された書評の大部分が、真っ先に著作の「内容」にばかり気を取られているということを、なぜヘーゲルが嘆いているのかということをほとんど理解しえなくなるであろう。なぜなら「すべての哲学することにおいてなによりも重視されるべき事柄は、まさに必然的な関係の、ひとつの形態から他の形態への移行の方法だからである」[草稿では、他の形態からのひとつの形態への移行と生成となっている](53)。

V

ここで私はひとまず以上のことで満足しておきたい。たしかに『判断力批判』の第七六～第七七節の意義はカント以後の哲学の展開にとって、以上のことによってすっかり汲みつくしえたということはない。しかし私にとってはなによりもまず、直観的悟性の概念と知的直観の概念が、きわめて明晰な仕方で区別されたということ、そしてそれが一八〇四年ごろのヘーゲルのイェーナ体系構想における変化の意義を明らかにしているということ、こういったことが重要であった。カントを超えていくふたつの認識様式の根本的差異が実現されていくことは、私の考えでは、ヘーゲルとシェリングとのあいだの決別の決定的な理由となった。シェリングは知的直観にのみ固執し、ヘーゲル宛の最後の手紙においても両者の差異への理解を示すことはまったくなかった(54)。知的直観は、「内的生命」とその対象の「発展」に適合せず、直観的悟性の認識様式へと変化させられるやいなやもはや必要ともされなくなるということは、ヘーゲルのイェーナ期におけるシェリングの出発点について、決定的となる理解であった。

このことは『精神現象学』序文において古典的定式のもとに示されている。

私の考えでは、直観的悟性の意義に立ち入ることは、彼にとって当時、ゲーテによってのみ仲介されえた。ヘーゲルのさらなる体系の展開に関しては、多くの問いがここではやむをえず、開かれたままである。とくに学の体系への導入という、のちに立てられる問いがその最たるものである。またヘーゲルとゲーテの交流は『精神現象学』で終わるわけでもない。おそらくなにか新しいことが発見され、他方でまた既知のことが新たな視点から考察される必要があるだろう。しかしすでにいまや次のことが明らかだというべきである。それはつまり、これまでよりも、ヘーゲルが一八二五年にゲーテに書き送り、私が本論文の第二部にエピグラフとして掲げた文を、真剣に受け取らなくてはならないということである。

私が自らの精神的な展開の来し方を眺めるなら、そうした道程のそこかしこであなたに負うところが大きいということに気づきます。そうしたわけで、自分自身をあなたの子どものひとりであると称してもよいくらいだと思っています。私の内面は抽象に対して抵抗していく強さをあなたからもらっていたのだし、あなたの教養と導きにそって歩みを進めてきたのでした。

註

（1）G.W.F. Hegel, *Gesammelte Werke*, hrsg. von der Rheinisch-Westfälischen Akademie der Wissenschaften, 4:6-7〔『理性の復権』（書誌は本註の続きを参照のこと）六頁〕（im Folgenden im Text zitiert als GW mit Band- und Seitenangabe）〔以下、引用に関して既訳のあるものについてはそれぞれ次のものを参考にさせていただいた。ただし、文脈に沿うように逐一明示することなく訳語を変更させていただいた箇所のある点をあらかじめお断りする。引用にさいしては、原著のページ数をアラビア数字で付したのちに、訳書のタイトルとページ数を漢数字で付している。また『哲学史講義』に関しては論文の執筆者と邦訳の訳者が底本としている版本がことなるため、既訳とは必ずしも対応しない個所がある。以下、主な訳書に関しては、あらかじめ各邦訳の書誌を記しておく。ゲーテの著作に関しては『ゲーテ形態学論集・植物編』（以下『形態学論集』）木村直司訳、ちくま学芸文庫、二〇〇九年。シェリングの著作に関しては『私の哲学の体系の叙述』（以下『叙述』）北澤恒人訳、『シェリング著作集3』所収、燈影社、二〇〇六年（ただし第一〇〇節までの抄訳）。ヘーゲルの著作に関しては『理性の復権――フィヒテとシェリングの哲学体系の差異』（以下『理性の復権』）山口祐弘・山田忠彰・星野勉訳、批評社、一九九四年。『信仰と知』上妻精訳、岩波書店、一九九三年。『精神現象学』金子武蔵訳、岩波書店、旧版一九七一―一九七九年／新版一九九五年（今回は新版を参照した）。『懐疑主義と哲学との関係』加藤尚武・門倉正美・栗原隆・奥谷浩一訳、未来社、一九九一年。『自然哲学（上）』本多修郎訳、未来社、一九七三年。『論理学・形而上学』田辺振太郎訳、未来社、一九八九年。『イェーナ論理学』小坂田英之・鈴木恒範・藤田俊治訳、『ヘーゲル論理学研究』所収、二〇〇三―二〇〇九年。『哲学史講義』長谷川宏、河出

書房新社、一九九二―一九九三年〕。

（2）*Schellings Werke*（以下 SWと略）, hrsg. von Manfred Schröter, Band 3 (C.H. Beck und R. Oldenbourg: München 1927), 23-24〔三七頁〕, vgl. 4 und 10.

（3）一八〇一年一〇月三日付シェリングのフィヒテ宛書簡。In *J.G. Fichte: Gesamtausgabe der Bayerischen Akademie der Wissenschaften*, III, 5:80-81

（4）Vgl. u.a. Horst Fuhrmans, “Schelling und Hegel. Ihre Entfremdung”, in *F.W.J. Schelling. Briefe und Dokumente*, Band I (Bonn: Bouvier 1962), 451-553; Hermann Krings, “Die Entfremdung zwischen Schelling und Hegel”, *Sitzungsberichte der philosophisch-historischen Klasse der Bayerischen Akademie der Wissenschaften* 6 (1976), 3-24.

（5）これにはたとえば懐疑主義や道徳的自然と、精神概念の問題との取り組みがかかわっている。こうした問題に関しては一般に次のものを参照のこと。Vgl. Rolf-Peter Horstmann, “Jenaer Systemkonzeptionen”, in Otto Pöggeler (hrsg.), *Hegel* (Freiburg/ München: Karl Alber 1977), 43-58.〔ロルフ・P・ホルストマン「イエナ期の体系構想」谷嶋喬四郎訳、オットー・ペゲラー編『ヘーゲルの全体像』谷嶋喬四郎監訳、以文社、一九八八年、七一―九〇頁〕

（6）すべてではないにせよ、これはまたディーター・ヘンリッヒによる、ヘーゲルのイェーナ期の発展を純粋に内在的に再構成する重要な試みにも当てはまる（vgl. Dieter Henrich, “Andersheit und Absolutheit des Geistes. Sieben Schritte auf dem Wege von Schelling zu Hegel” in ders., *Selbstverhältnisse*, Stuttgart: Reclam 1982, 142-172)。なぜなら、ヘンリッヒはたしかに論理学と形而上学の差異が不要とならねばならない理由を

きちんと提示しているけれども、「ヘーゲルの発展プロセスにおける思考のモチーフを実際に結び付ける」(154)という要求については諦めているからである。

(7) これについて的確に提示しているものとしては次のものを参照。Vgl. Manfred Baum, *Die Entstehung der Hegelschen Dialektik* (Bonn: Bouvier 1986), bes. 31f., 113f., 133ff. ただしバウムもまた知的直観と直観的悟性の区別をつけてはいない。

(8) Vgl. Klaus-Dieter Müller, *F.J. Schelver 1778-1832* (Heidelberger Schriften zur Pharmazie- und Naturwissenschaftsgeschichte, Bd.7), Stuttgart: Wissenschaftliche Verlagsgesellschaft 1992. Vgl. auch Thomas Bach, „Für wen das hier gesagte nicht gesagt ist, der wird es nicht für überflüssig halten.“（ノノノで言われたことが誰に言われていないのか、それは不要な事柄ではない）“Franz Joseph Schelvers Beitrag zur Naturphilosophie um 1800”, in *Naturwissenschaft um 1800. Wissenschaftskultur in Jena-Weimar*, hrsg. von Olaf Breidbach und Paul Ziche (Weimar: Böhlaus Nachfolger 2001), 65-82.〔なお、前号に訳出した第一部での言及のさいに、この人物名を「シュレーヴァー」と転記していたが（第八号一八三頁）、以下にみるように「シェルヴァー」の誤りである。ここに謹んで訂正させていただく――訳者註〕

(9) 彼の履歴書においてシェルヴァーは書いている。「“...maximum Fichtium in scientia transcendentali in Logica et Metaphysica, in Ethica et naturali phylosophico Ducem habui”〔私は偉大なフィヒテを論理学と形而上学、倫理学と自然哲学についての超越論的学に関しての師に持った〕」（ミュラーによる引用 a.a.O., 17）。

(10) この講義の筆記が Hd-HS-1358 という番号がつけられてハイデルベルク大学図書館に所蔵されている。

(11) *Zeitschrift für organische Physik*, herausgegeben von Schelver (Halle: in der Rengerschen Buchhandlung,

1802/1803).

(12) A.a.O., Ersten Bandes erstes Heft (1802), 17.

(13) A.a.O., 31-32.

(14) Vgl. *Erlanger Litteratur-Zeitung*, Nr.4 (Januar 1802), 32 und Nr.19 (März 1802), 151f.

(15)「彼はたしかに私の支持者としてふるまっていたし、自然哲学をまったく自らのものとしたかのようにふるまっていた。しかし後者についてはかなり不十分であった」。In *F. W. J. Schelling. Briefe und Dokumente*, a.a.O., 254.

(16) Vgl. 一八〇三年一月二四日付シェリングのゲーテ宛書簡。In *F. W. J. Schelling. Briefe und Dokumente*, a.a.O., Band 2, 485.

(17) Zitiert nach Irmtraut Schmid, *Die naturwissenschaftlichen Institute bei der Universität Jena unter Goethes Oberaufsicht"*, Diss. Berlin (DDR) 1979, 49-50 (kursiv E.F.).

(18) Vgl. 一七九四年二月二六日付ゲーテのバッチュ宛書簡。In *Goethe Werke*, Weimar Ausgabe(以後WAと略), IV, 10:144.

(19) 契約書はイルムトラウト・シュミットの本において活字化されている（a.a. O., 34)。

(20) ゲーテはシェルヴァーとの取り決めを一八〇三年の四月二三日に書面で交わしている（vgl. Irmtraut Schmid, a.a.O., 34)。

(21) この友好関係の詳細と範囲に関しては、私の知るかぎりでは膨大なヘーゲル研究においてもまったく扱われてこなかった。ゲーテはシェルヴァーとヘーゲルをしばしば一緒に自らのところへ招いていた。イェーナ期に

ついての同時代の報告によれば、二人の名を幾度も同時にあげている。多くの例のなかでもここではアダム・ミュラーからカール・グスタフ・フォン・ブリンクマンにあてた一八〇四年八月二一日の手紙が、例として適切だろう。「私はこの夏をまたイェーナで過ごしました。そこでは上機嫌の二人、シェルヴァーとヘーゲルとともに多くの時間を過ごしました」。引用は以下による。*J. G. Fichte im Gespräch*, hrsg. von Erich Fuchs, Band 3 (Stuttgart: Frommann-Holzboog 1981), 264.

(22) *Briefe von und an Hegel*, hrsg. von Johannes Hofmeister, Band 1 (Hamburg: Meiner 1952), 78.

(23) 一八〇三年一〇月二七日付シェリング宛書簡。引用は以下による。K.-D. Müller, a.a. O., 177f.

(24) WA IV, 16:356（強調はフェルスターによる）。この日の日記の記述も参照のこと。WA III, 3:88. シェルヴァーが（ときにはヘーゲルとともに、またほかの場合にはヘーゲルが一人で）訪問したほかの日に関しては、一八〇三年の以下の日付の日記に記述されている。三月一〇日、五月二日、一〇月二〇日、一一月八日、一一月三〇日、一二月二日（ヘーゲル）、一二月三日（ヘーゲルとともに）、一二月八日（ヘーゲル）、一二月二〇日（ヘーゲル）。

(25) 授業予告はバッハによって引用されている（a.a.O., 73）。

(26) 引用は以下による。K.-D. Müller, a.a.O., 175.

(27) 引用は以下による。Schmid, a.a.O., 35

(28) 戦闘の四日後、シュライヤーはゲーテに次のように書き送っている。「私の部屋はことごとく略奪されてしまいました。植物博物館も完全に破壊しつくされてしまいましたし、標本も滅茶苦茶にされてしまいました。水と泥にまみれた地面のうえに打ち捨てられているのです。私の幾冊もの本は燃やされてしまいました…。服

も、最後のお金も持ち出されてしまいました…」（引用は以下から。Richard und Robert Keil (Hrsg.), Goethe, *Weimar und Jena im Jahre 1806*, Leibzig: Verlag von Edwin Schloemp 1882, 62）。

(29) ゲーテは、シェルヴァーがのちに激しく攻撃されることになる、植物の雌雄の否定を一面的にではあるが、メタモルフォーゼの思考の、それなりに一貫したさらなる展開ととらえている（vgl. *Goethes Gespräche*, Biedermannsche Ausgabe, ergänzt und herausgegeben von Wolfgang Herwig, München: Deutscher Taschenbuch Verlag 1998, Band 2, 788）。

(30) Franz Joseph Schelver, *Lebens- und Formgeschichte der Pflanzenwelt*, Heidelberg: bey Joseph Engelmann, 1822, vi-vii. これとの関連で一八〇五年二月六日付シェルヴァーのゲーテ宛書簡をも参照。「親切にもあなたが私の植物をめぐる著作に注目を寄せてくれることは、私を励まし、力を与えてくれます。それはあなただけが最初に、私に愛情に満ち、父のように呼び起こし、求めてくれたものを完成させ、外へと持ち出させます。あなたの友人たちのために、そしてあなたが私をかつてイェーナへと迎えることを決めてくださった、その素晴らしい瞬間に見合うものになれますように」（以下からの引用。K.-D. Müller, a.a.O., 167）。

(31) *Goethe Gespräche*, a.a.O., Band 3/1, 577.

(32) Karl Rosenkranz, *Georg Wilhelm Friedrich Hegels Leben* (Nachdruck Darmstadt: Wissenschaftliche Buchgesellschaft 1977), 220, 198.〔カール・ローゼンクランツ『ヘーゲル伝』中埜肇訳 みすず書房、一九八三年、一九七、一八一頁〕

(33) 一八〇三年一一月二七日付シラー宛書簡 WA IV, 16:356.

(34) 引用は以下による。*Goethe. Begegnungen und Gespräche*, hrsg. von Renate Grumach, Band V (Berlin/New

York: de Gruyter 1985), 501.

（35）引用は以下による。*Hegel in Berichten seiner Zeitgenossen*, hrsg. von Günter Nicolin (Hamburg: Meiner 1970), 79.

（36）*Briefe von und an Hegel*, a.a.o., 85.

（37）Vgl. den “Editiorischen Bericht” zu Band 7 von Hegels *Gesammte Werke*, a.a.O., 360-2.

（38）14.3.1807, WA IV, 19:283.

（39）*Briefe von und an Hegel*, a.a.O., 142.

（40）その人物はイェーナの私講師であるフリードリヒ・ジギスムント・フォイクトである。一八〇六年一〇月二四日付ゲーテのC・クネーベル宛書簡を参照のこと。WA IV, 19:216.

（41）An Henriette v. Knebel, 15.5.1807. 引用は以下による。*Goethe. Begegnungen und Gespräche*, a.a.O., Band VI, 143.

（42）ここで前提とされているこの論文の第一部の第三節は以下の雑誌に掲載されている。*Zeitschrift für philosophische Forschung* 56 (2002), 2, 14-19.〔エッカート・フェルスター「カント以後の哲学の展開にとっての『判断力批判』第七六～七七節の意義［第一部］」拙訳、『世界の視点――知のトポス』第八号、新潟大学大学院現代社会文化研究科、新潟大学人文学部哲学人間学研究会、二〇一三年、一七三―一八〇頁〕

（43）この理念はよく（いくぶん誤解を招く仕方で）「すべては葉である」という表現で引用される。より精確に言えば、植物のすべての外的な器官と同様、植物の葉は根源的な理念のひとつの特殊な形態である。植物のすべての諸形態は理念にしたがって同一である。「この器官は、茎に沿って葉として広がり、最高度の多様な形を

獲得した器官であり、萼において収縮し、花びらにおいてふたたび広がり、生殖器官において収縮する。そして最終的には果実として広がるのである」（「植物のメタモルフォーゼ」第一一五節〔『形態学論集』一二九頁〕）。

（44）一八〇一年一月二六日付シェリングのゲーテ宛書簡を参照のこと。「その提示による植物のメタモルフォーゼはすべての有機的なものの成立の根本図式として汎通的にあかされた。すべての有機体の内的同一性をそれ自身の下で、いまやすでにきわめて詳細に示したのである［…］。メタモルフォーゼはすでに有機的な自然を前にして生じているように、化学的な謎という語であるように思われる」（*F.W.J. Schelling, Briefe und Dokumente*, a.a.O., Band 1, 243, 240）。

（45）Vgl. Schelling,*Darstellung meines System der Philosophie* 第四四節注解〔『叙述』四八—四九頁〕、*System des transzendentalen Idealismus*, SW 3:385-7, 390.〔『先験的観念論の体系』赤松元通訳、蒼樹社、一九四八年、七二—七六頁、七九—八一頁〕——私は全集第七巻の編者がこの箇所をフィヒテ批判として理解し（7:369）、観念的行為についても実在的行為についても、また境界についても触れることなく、第四巻の三九五ページから四〇〇ページへの参照を付していることについて同意しない。私の考えでは、ヘーゲルは内在的な重さを伴う引力と斥力から、物質の（カント／シェリング的）構成を手がかりにして「実在的行為」を説明しているように思われる（GW7:4.8-5.12〔『イェーナ論理学』八〇—八一頁〕）。

（46）カール・フリードリヒ・バッハマンもまた次のように述べている。「ヘーゲルはなおもここイェーナにおいて私の先生でした。私は彼に多くのものをおっていることを喜んで認めます。ヘーゲルは私にまず、当時若い情熱をもって取り組んでいたシェリングの体系の間隙に気づかせてくれ、哲学が学となりうるのは、厳格な方法によって、また一歩の契機から他方の契機への適切な前進における事柄そのものの内的必然性によってのみで

ある、という考えに導いてくれました」。引用は以下による。*Hegel in Berichten seiner Zeitgenossen*, a.a. O., 80.

(47) これを証明することは、アンネ＝クリスティーナ・クァーデの博士論文の関心のうちのひとつである。Anne-Kristina Kwade, *Grenz: Hegels Grenz"-Begriff 1804/5 als Keimzelle der Dialektik* (Würzburg: Könighausen & Neumann 2000).

(48) 聴講者のひとりである、ゲオルグ・アンドレアス・ガブレーはこれを次のように書き記している。「ヘーゲルが当時熱心に絶え間なく取り組んでいた原典研究のもとで仕上げた諸講義は、ともかくも非常な関心をもって聴講された。その関心はとりわけ当時のまったく新しい体系から体系への移り行きを引き起こしたのだった」。引用は以下による。"Dokumente zu Hegels Jenaer Dozententätigkeit (1801-1807)", hrsg. von Heinz Kimmerle, in *Hegel-Studien* 4 (1967), 69.

(49) Jubiläumausgabe, Band 17, 48（以下の引用はこの版によるものである）。これは編者である、カール・ルートヴィヒ・ミヒェルによる、後期の手稿や講義ノートから編集したテクストである。これを編集した理由は、彼がここに、同様に彼のもとにある一八〇五年のイェーナ諸論にみられるよりも、より大きな「明晰さ、堅実さ、説得力」（3）を看て取っているからである。したがって諸論の間に、事柄に即した差異を看て取ることは正当ではない。ローゼンクランツもまた一八〇五年のイェーナ講義について次のように語っている。「哲学の歴史についてのこの講義をヘーゲルは、彼の出版されている後年の講演においても、本質的には変更せず、たんにより豊かに仕上げたのみであった」（*Georg Wilhelm Friedrich Hegels Leben*, a.a.O., 201〔『ヘーゲル伝』一八三頁〕）。

(50) これにはローゼンクランツの次のような指摘があたる（a.a.O., 202）。「したがって彼〔ヘーゲル〕はまず「論

理学と形而上学入門」のなかで意識が自分自身について行う経験の概念を展開した。ここから一八〇四年以後、『精神現象学』への素地が生まれた」〔『ヘーゲル伝』一八四頁〕。

(51) これに対応してヘーゲルは、シェリングをこの時代のある講義で批判している。「彼の後期の哲学観において シェリングは、それ自身にそくした展開なく、普遍的に思弁的な理念を打ち立て、すぐさまそれが自然哲学として有する形態へと移行しているのである」(GW 5:472)。

(52) 当然のことながら、これによって論理学はもはや形態をあつかうのではなく、運動における純粋概念を提示することになる。これについては『精神現象学』の後ろから四番目の段落を参照のこと(GW 9:432〔『精神現象学』一一六〇—一一六二頁〕)。

(53) 一八一〇年一〇月一五日付ヘーゲルのファン・ゲルト宛書簡。In *Briefe von und an Hegel*, a.a.O., 330.

(54) 「私には今までのところ君が直観という、概念を拒否する意図がわからないのです。君がその(悟性の)もとで考えうるのは、君と私が理念と名付けているものにほかならないはずで、その本性は一方で概念であり、もう一方で直観である側面をもつことにあると思うのです」(In *Briefe von und an Hegel*, a.a.O., 194)。

訳者解題——直観的悟性の帰趨

ここにエッカート・フェルスター「カント以後の哲学の展開にとっての『判断力批判』第七六〜七七節の意義」が、前号に掲載された第一部に引き続き、第二部も訳出された。

本論文全体を通してまず目を引くのは、カントに始まり、その思考を引き継ぎ展開する「哲学者」ゲーテ、かれのスピノザとの取り組み、そしてゲーテとヘーゲルのミッシングリンクとしてのシェルヴァー、そしてある意味でシェルヴァーがキーパーソンとなるシェリングとヘーゲルの別離といった、一方においてよく知られ、他方においてはあまり知られていなかった、それぞれの哲学者における邂逅と別離とをめぐる思想史的な事柄であろう。

それ自体でもきわめて興味深い哲学者たちの関係の途行きを導いたものは、しかし、何であったのか。ことは、たんに思想史的な事柄を回顧的に辿ることにとどまるものではなく、フェルスターの見るところ、むしろ哲学の企ての本質をめぐる問いに関わっている。つまり学としての哲学は可能か、可能であるのならばいかにしてか、どのような方法論のもとで可能なのか。こうしたことが、悟性／知性のあり方を軸にして問われているのである。

哲学の始まりと終わり

本論文の始まりと終わりに位置する人物、すなわちカントとヘーゲルはそれぞれ、一七八一年より前に哲学は存在せず、一八〇六年に哲学は完結したと述べた。こうしたある種奇妙なものとしても響き得る言明を真剣にとること、ここにフェルスターは自らの仕事の始まりを見いだしている（Eckart Förster “Eine systematische

Konstruktion?" in *Übergänge-diskursiv oder intuitiv? Essay zu Eckart Försters Die 25 Jahre der Philosophie*, hrg. Johannes Haag und Markus Wild, Vittorio Klostermann, Frankfurt am Main, 2013, S.350.)。カントがこう宣言した理由は、かれにとってそれまでの哲学は「自然的素質」に基づくものであり、学としての資格をそなえていなかったということにある。

カントがある場所で述べているように、かれにとって哲学が学であるためには、その諸原理が「必然性の意識」と結びついていなくてはならない（『自然学の形而上学的始源根拠』IV 468）。カントはそれを主観的認識能力の働きにおいて見いだしたのであり、ヘーゲルは概念自身の運動に見いだした。ふたりの解決策のあいだには、しかし、大きな隔たりがあるようにも思われる。

こうした隔たりを埋めていく仕事こそ、本論文においてフェルスターが遂行したことにほかならない。以下では直観的悟性（知性）をめぐる思考の帰趨について、その連続性に重点をおきつつ、本論文を第一部も併せて振り返っておくことにする。

知的直観と直観的悟性

ゲーテがカントの『判断力批判』の第七六節、第七七節から、その意義として取り出したのは、「知的直観」と「直観的悟性」とが、有限的存在者である人間に可能なものとしても呈示されたということである。

しかしその両者が含み持ち得るすべての働きが人間にも可能であるわけではない。これらはさらに各々二つに分たれる。すなわち知的直観は可能性（思考）と現実性（存在）の産出的統一としての知的直観（1a）と、物自体の

非感性的直観としての知的直観（1b）に分たれ、直観的悟性は総合的＝普遍的悟性としての直観的悟性（2a）と根源的悟性、世界原因としての直観的悟性（2b）に分たれるのである。

以上の四つのうちまず、物自体の認識は定義上不可能である。それゆえ物自体の非感性的直観としての知的直観（1b）の可能性が消去される。また、有限的存在者は有限であるがゆえに世界原因とはなりえない。それゆえ根源的悟性、世界原因としての直観的悟性（2b）の可能性が消去される。こうして、有限な人間の悟性にもなお許され得る可能性は残されたふたつということになる。

フェルスターによれば、このふたつの可能性のうち、可能性（思考）と現実性（存在）の産出的統一としての知的直観（1a）を引き継いだのがフィヒテと初期シェリングであり、総合的＝普遍的悟性としての直観的悟性（2a）を引き継いだのがゲーテであった。ゲーテによって引き継がれた後者の途行きこそが、本論文で主として追跡されることになる（第一部一七〇頁を参照）（第一部の頁数は本誌第八号の、第二部の頁数は本号（第九号）のものを指す）。

自然の創造への精神的参加

ゲーテはなぜ、そしていかにして総合的＝普遍的悟性としての直観的悟性（2a）を引き継ぎ、展開したのだろうか。かれの動機は「直観的判断力」と題された小文に直截に記述されていた。すなわち「われわれは絶え間なく創造する自然を直観することによって、その産出の営みに精神的に参加するのにふさわしいものとなるべきである」（第一部一七一―一二頁）。

こうした参加のために、ふたつのことが要求される。すなわち一方で「諸現象それ自体を完全にわがものとする」こと、他方でそれを「精神においてふたたび産出する」ことである（第一部一七七頁）。

この要求を満たすために認識能力は、次の二つの性質をともに具えていなくてはならない。すなわち「加法的」かつ「連続的」に生じる現象を「追体験する」ための「熟慮」すなわち悟性の性質と、一つの部分のみならず全体が同時に生起する現象を把握するための同時性を具える直観の性質とのふたつである（第一部一七七―八頁）。

直観知と手で触れられる展示物

前段に示された直観的悟性の把握に関してフェルスターが示す、以降の展開を理解するためにおさえておくべきポイントは二点である。それは一方でスピノザに由来する「直観知（scientia intuitiva）」との結びつきがみいだされることであり、他方でイエナ大学の博物標本コレクションにおいて「より高次の経験」を可能にする実践的な経験の場が提供されたということであった。

スピノザは「直観知」の例として幾何学の証明を挙げていた。幾何学の証明は次の三点を前段落に見た直観的悟性と共有する。すなわち第一に証明プロセスの遺漏のない呈示、第二に全体として統合されることが必要であること、そして第三にひとつの証明が全ての場合に妥当するという「より高次の経験」が生じ得るということ、この三点でが共有されるのである（第一部一八一頁）。

他方で植物学のコレクションは飛躍をしない自然の実物に「手で触れられる展示物」として、実践的な訓練を具体的に提供することとなる（第一部一八二頁）。

以降の展開について本論文では、シェルヴァーという比較的マイナーな人物を介した、ゲーテからヘーゲルへの展開の道が、シェリングとの関係についても触れつつ記述される。

しかしその前に本論文では註において示唆されるにとどまる、ゲーテとフィヒテとの関係についても、件の註の

指示に従って「ほらそこに、われわれみなが感謝する人が往く――ゲーテとフィヒテとの関係について」（未邦訳）をもとに、簡単に触れておくことにしよう。

分極性

同論文においてはゲーテとフィヒテとの関係について、とくに両者の思考の関係という点では、これまで検討してきた悟性／知性をめぐるカントの思考が直接的に問題とされてはいない。むしろその延長線上でのゲーテとフィヒテとの思考上の交流が問題とされている。二人の主要な関係の場は『色彩論』である。

ゲーテによれば、自然は根本的分極性（fundamentale Polarität）によって結びついている。この分極性にフィヒテは、知識学の第三節等において、魂の必然的な行為における定立と限定と、全ての認識の根底にあって対象の構成に先行する行為における収縮と拡張とについて検証することで、学問的基礎を与えることを試みている。こうしたフィヒテの取り組みによって、ゲーテはある書簡において、自らの仕事が学的に基礎付けられることへの希望を見いだす。

交互規定

フェルスターの認定によれば『色彩論』第五〇節の「有彩色の調和」理論は、フィヒテの知識学における交互規定、すなわち自我と非我、主観と客観の総合をめぐる議論と取り組む中で獲得された。自我と非我の規定は、連続的な限定として、意識において定立された、現実性の全体性の量的分割として思考されることになる。

こうした交互規定の基礎付けとして、フィヒテが「交互性一般への衝動」に基礎をおく一方で、ゲーテは他方で

自らの調和の理論を「全体性への要求」に基礎付けることとなる。このように部分と全体との関係をめぐってなされてきた本論文の議論の流れの延長線上に、ゲーテとフィヒテとの間の思考上の交流が見いだされうる。

フィヒテのこうした交互規定をめぐる議論について、ヘーゲルがいわゆる「差異論文」において批判を加えている。これに触れつつ、ゲーテからヘーゲルへの道について記された本論文の記述へと戻っていくことにしよう。

「差異論文」における知的直観

ヘーゲルによる批判の根底にあるのはフィヒテにおける思弁的原理である、「自我＝自我」の形式から帰結する有限性である。こうした有限性は「脱ポテンツ化」を帰結するがゆえに、ヘーゲルの考える「真の思弁的本質を生み出すことになる同一性と真の無限性」へといたることが不可能となる（第二部一三六頁）。

これに対してヘーゲルは反省と直観が一つのものとなる「超越論的知」を提示する。これは一方で対立するものの同一性を示す反省という消極的な働きと、他方で思考された統一の現実性を保証する直観という働きとが合一したものであり、背後には絶対的認識のモデルがあるといえる（第二部一三六―三七頁）。

ここに先に見た、カントの可能性（思考）と現実性（存在）の産出的統一としての知的直観（1a）の影響をみてとることができる。ヘーゲルは、『叙述』にみられるような超越論的哲学と自然哲学との「無差別点」をめぐる思考から、こうした知的直観の思考を引き継いでいたのである（第二部一三七頁）。

直観的悟性の受容の機縁

フェルスターによれば一八〇三年を起点としてヘーゲルの思考は変化している。それは思考におけるヘーゲルと

シェリングとの別離とゲーテとの出会いによるものであり、『判断力批判』における知的直観と直観的悟性の解釈という視点から言えば、可能性（思考）と現実性（存在）の産出的統一としての知的直観（1a）という解釈から、総合的＝普遍的悟性としての直観的悟性（2a）という解釈への移行によるものである。こうした移行は先にも挙げたシェルヴァーとの交流を機縁としている（第二部一三八―四一頁）。

シェルヴァーは初め、シェリングの「無差別の点」等の議論を受け入れ、自身の自然哲学へと取り入れていた。しかしゲーテのもと、先に挙げておいたイエナ大学の博物標本コレクションでの仕事に取り組む中で、実践的な仕方でゲーテ的な直観的悟性の思考を身につけることとなる（第二部一四二―四六頁）。

さらにシェルヴァーとヘーゲルとの個人的な交流を通して、ヘーゲルはゲーテとも親しい間柄となった。こういった事情が先に記した移行の直接的な機縁ともなったのである（第二部一四六―四八頁）。その哲学的背景について触れる前に、シェリングのゲーテ理解について検討しておこう。

メタモルフォーゼをめぐる（無）理解

先にフィヒテとの関係において見たように、ゲーテにあって絶え間なく創造する自然は、収縮と拡張といった働きのもとにある根本的分極性と結びついている。こうした自然は、直観的悟性（2a）の働きによって、すなわちその諸形態の完全な系列を作り出し、系列に即して概念を流動化して諸部分の間を移行することによって認識される。その際、同じ一つの理念は探求の根底にあるのではなく、むしろ探求を導く目指すべきものであり、先の移行は理念へと到るための「精神的梯子」となる（第二部一五〇―五一頁）。

こうした次第について同一哲学期のシェリングは、拡張と収縮を根本図式として取り入れつつも、そこから時間

性を廃棄する。それゆえかれにあって自然は「根源的同一性の無時間的分化」、同じものの反復的なポテンツ化として構成されることになる（第二部一五一頁）。

シェリングにおいてはゲーテ的な移行の契機はありえず、それゆえにゲーテの思考の根本にある直観的悟性（2a）という考えを受け入れることもまたなかった（ただしダリア・ナッサールは、シェリングとゲーテとの間の距離をより近く見積もることも可能であるとしている。Vgl. Dalia Nassar “Intellectual Intuition and the Philosophy of Nature”, a.a.O. S. 235-258）。シェリングの無時間的な自然哲学はこうして、可能性（思考）と現実性（存在）の産出的統一としての知的直観（1a）という理解のもとにある、とフェルスターは認定することとなる（第二部一五二―五四頁）。

直観的悟性への移行の哲学的背景

さきに見たように「差異論文」時代のヘーゲルはシェリングと同様に知的直観（1a）のもとに思考していた。しかし上述のゲーテとの交流を通し、直観的悟性（2a）の受容へと転回したのであった。その哲学的背景とは、しかし、何だったのだろうか。

一八〇三年にヘーゲルはシェリングのポテンツ概念を、絶対的なものの構成をめぐる説明方式としては拒否した。ヘーゲルはここに発展への論理の欠如を見いだすようになったのである。そのかわりヘーゲルは、それ以前には非感性的直観にのみ可能であると考えていた「全体」を、概念的ないし論理的に把握することが可能であると考えるに到る。

これは例えば、『精神現象学』の構成という面から見れば、中心部に位置するにも関わらず、連関のとり難い

「理性章」と「精神章」との関係にそくして捉えることもできるだろう。フェルスターは本論文の後『哲学の二五年』の第一二節等において、ヘーゲルが理性の弁証法に加え、精神の歴史的発展の説明を必要としていた次第を書き記すこととなる（併せて以下も参照のこと。Vgl. Terry Pinkard “From Schelling's Naturalism to Hegel's Naturalism”, a.a.O. S. 275-288）。

しかし、明示的に記されてはいないものの、この論文においてもその論脈を辿ることは可能である。以下「イエナ論理学」から「哲学史講義」を経て、『精神現象学』へと到るヘーゲルの思考の途行きを辿って行くことにしよう。

移行と限界をめぐる思考

知的直観と直観的悟性とは、「移行」の契機をめぐって分かたれることとなる。しかし、そもそも移行ということが問題とされるには、二つの領域を分かつ限界の存在が前提されなくてはならないだろう（第二部一五四―五五頁）。

「イエナ論理学」においてヘーゲルは、限界にまつわるこうした前提をめぐって論じている。ヘーゲルによれば限界とは、質の概念の「あるべきでないもの」から「あるべきもの」への移行が生じるところである。これについて視点を変えれば、限界とは規定態の数多性が無関与なものとして締め出されるところである、といいあらわすこともできるだろう。つまり限界においては質から量への移行もまた、生じているのである。こうして、概念から概念への移行は、根本的な諸概念の固有の運動において成立することが理解される。

以上のように概念そのものの運動という把握へと到達することで、ヘーゲルはもはや知的直観（1a）を必要としなくなった。ただし、直観的悟性（2a）を自らのものとして論じることもまた、この段階では不可能であった。実

際ヘーゲルがゲーテに献呈しようとした一八〇四年の「論理学、形而上学、自然哲学」は、「自然哲学」の有機体へと話を移す箇所で途絶している（第二部一五五―五七頁）。いったい何が欠けていたのだろうか。

経験と、理念と精神の発展

それを知るための鍵はさらに一年後、一八〇五年の「哲学史講義」にある。ここにおいてヘーゲルは植物の生長と精神の展開とを比較しつつ論じている。植物の生長においては種子が展開されて果実となった場合、出発点である種子と到達点となる果実とは別々の個体となる。果実に含まれる種子は再びまた果実となりうるが、そうした過程を見届け、同じものの反復とみてとるのは外的な観察者である。

それに対して精神の展開の場合は出発点と到達点とが同じ自己であり、生じる移行を自らが意識することになる。それゆえ自分自身から出発し、自分自身を越えて、自らが自分自身の他者となるのであり、かつそのことを自分自身のこととして意識しているのである。ヘーゲルによればこうした弁証法的運動が、経験と名付けられるものにほかならない。こうした経験によって理念や精神もまた発展していくのである（第二部一五七―五九頁）。

こうした考えに到ったヘーゲルにとって理念はもはや論理学の端緒でもなければ、諸概念の運動を導くものでもない。「本質的に理性の本性であるのは、発展すること、発展を通してのみ把握され、本来の理念になることにある」。こうしてヘーゲルにとって理念はプロセスであり、弁証法的であるものとして把握されることとなる。こうしたプロセスであり、弁証法的である理性を把握する悟性の働きこそ、直観的悟性（2a）にほかならなかったのである（第二部一五八―六〇頁）。

超感性的に経験すること

理念が弁証法的であるなら、理念の学である形而上学もまた学として弁証法的となる。さらに、ヘーゲルにとって思弁の始原へと導く役割をもつ論理学もまた弁証法的であるから、両者の区別はなくなる。両者は同じ弁証法的学としてひとつのものとなるのである（第二部一五九―六一頁）。

ヘーゲルは先にも挙げておいたゲーテの「精神的梯子」という言葉を意識しつつ、『精神現象学』を思弁に到るための「梯子」と自らよんでいる。この書において実現された方法論的プログラムこそ、まさにヘーゲルによる直観的悟性（2b）の展開にほかならなかった。すなわち（a）意識の諸形態の完全な系列を作り出し、（b）なによりも形態の間の移行を問題としつつ、諸形態を全体として跡付けながら観察する。その結果最終的に（c）理念、「純粋概念」の認識ないし「絶対知」が成立することになるのである（第二部一六一―六二頁）。

フェルスターによって追跡されたカント『判断力批判』からヘーゲル『精神現象学』に到る一七年間の思考の展開は以上の通りである。こうした展開を一言でいうならば、超感性的な認識を放棄し、超感性的に経験することへと到る道であった、ということもできるであろう。

哲学の終わり？

ヘーゲルの言によればこうして哲学は完結した（vollendet）のであった。カント的な意味での哲学の始まりとは、学としての哲学の始まりを指していた。それではヘーゲルの言う意味での哲学の完結ないし終わり、とはいったい何を意味しているのだろうか。

それは、フェルスターの見るところ、ある意味で当然のことながら、哲学そのものの終わりを指しているのでは

ない。ヘーゲル以前の哲学、すなわち主客の対立図式を前提とした、悟性の働きとして論弁的な働きのみを認める哲学の終わりを意味しているのである。

しかし一般に、なにかあるものの終わりは新しいものの始まりともなり得る。実際ヘーゲルは別様の哲学のあり方を指し示してもいた。それは論弁的な働きのみならず、系列を作り出し、自らの力によって直観化していく悟性の働きに基づく哲学であった。ヘーゲルはあるひとつの哲学の終わりと同時にほかの哲学の始まりを示していると、こうして、フェルスターは認定するのである。

こうした議論の射程についてより詳細に論じるためには、本論文を読むだけでは当然のことながら十分とはいえない。この論文をもとにしつつ『純粋理性批判』にまで溯り、フェルスターは二〇一一年に、本解題においてもさきに名を挙げておいた『哲学の二五年』という一冊の本を書き上げている。『純粋理性批判』から『精神現象学』に到るまでの二五年間をめぐって、本論文が扱った哲学史的展開と、悟性／知性と哲学の方法をめぐる議論とが全面的に展開されるこの本全体に目を通した上で初めて、その射程を測定することが許されるだろう。

本稿が掲載される二〇一四年春現在、『哲学の二五年』はドイツ語版と英訳版が入手可能である。邦訳プロジェクトもすでに進行中であり、そう遠くないうちに日本語でも読むことが可能となるはずである。

［解題＝大熊洋行：東京大学大学院人文社会系研究科・フライブルク大学哲学部博士課程在籍］

訳者附記

ここに訳出されたのは、前号に掲載された同題論文の第二部、Eckart Förster, “Die Bedeutung von §§76, 77 der *Kritik der Urteilskraft* für die Entwicklung der nachkantischen Philosophie [Teil II]” in: *Zeitschrift für philosophische Forschung* 56.3 (2002), 321-345 である。訳出にさいしては、次の英訳を適宜参考にした。“The Significance of §§76 and 77 of the *Critique of Judgment* for the Development of Post-Kantian Philosophy (Part 2)”, trans. by Karen Ng and Matthew Congdon, *Graduate Faculty Philosophy Journal* 31.2 (2010), 323-347. なお、本論文は、題名を変えて下記のヘーゲル論集にも収録されていることを付け加えておく。“Hegel in Jena” in: *Das Interesse des Denkens. Hegel aus heutiger Sicht*, hrsg. Wolfgang Welsch und Klaus Vieweg, Munich: Wilhelm Fink Verlag, 2004, S. 109-129.

本論文の訳出にあたっては、前号と同様、大熊が訳出した草稿をもとに、宮﨑が訳文全体を検討・推敲したのち、さらに両者の確認作業を経て完成させた。

最後に、本論文の訳出・掲載にご快諾いただき、訳者の質問に丁寧に答えてくださったフェルスター教授にあらためて深謝申し上げる。［宮﨑裕助］